

特集展示 井田照一

2012年3月6日(火)～5月27日(日)

版画の概念を問い直すことから独自の作品を展開した作家、井田照一(いだ・しょういち/1941-2006)の特集展示を行います。

1941(昭和16)年、京都市に生まれた井田は、京都市立美術大学に学び、1965(昭和41)年に同大学西洋画科専攻科を修了しました。在学中、吉原英雄に版画を学び、リトグラフ(石版画)に取り組むことから、作家活動を開始します。また印刷所に通い、独学で版画の技術を身につけました。元々油絵を描いていたのですが、筆跡を残さず、平面的で情緒性に依存することのない表現の可能性をリトグラフに見出し、単純な色面などによって画面を構成する作品などを手がけます。その後シルクスクリーンの技法も取り入れながらポップアートの作品を作りますが、ここではイメージをより表層的に表現することが目指されました。その薄さの表現は、風や空気など非物質的な存在をイメージ化する試みへとつながり、さらに版画を使ったインスタレーションへと展開するに至ります。

そしてなにより、井田の評価を決定づけたのは、1970年代中頃から始まる、「Surface is the Between / 表面は間である」というコンセプトをもとにした仕事でしょう。版画制作において、垂直と水平のエネルギーが出会う場所であり、イメ

ジとそのイメージが刷られる紙の接点である「紙の表面」に注目し、表と裏の両面に刷るなど様々な版画技法を駆使した実験的な作品の試みは、井田独自のものです。

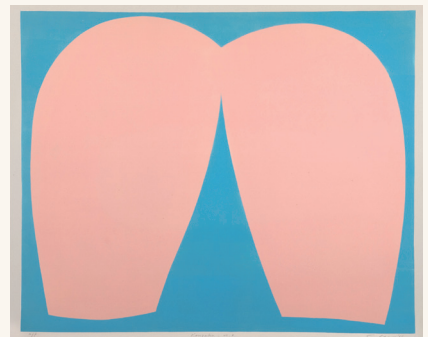
そのきっかけは、紙の上に置きっぱなしにしていた小石でした。ある時、ふと小石を動かしてみると、その自重で紙の表面に、わずかながらも跡を残していたことに井田は注目します。小石の重さと机の水平面との間に位置していた紙片が示した、作用と結果、水平と垂直、重力と平面、位置と自重、等における表面性の証。それは版画を作るプロセスそのものではないかと認識したのです。

井田は、版画の概念を根源的に問うことによって、版画についての版画というべき作品を生み出しました。そして、その探究はペーパーワークや、ブロンズ、セラミックなど様々なメディアへも展開します。

当館では、1988(昭和63)年に「版画の4人展 井田照一・木村光佑・黒崎彰・船井裕」を開催して井田作品を紹介するとともに、60年代から70年代にかけて制作されたリトグラフ、シルクスクリーンなどの作品を既に20点所蔵していますが、この展示では、当館コレクションと、没後スタジオに残された作品により、井田の仕事をご紹介します。およそ70点の出品予定です。(奥村一郎)



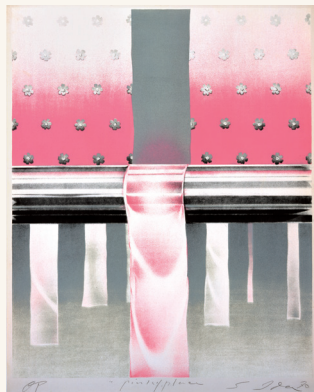
《Surface is the Between—Between Vertical and Horizon—“Stone, Paper and Stone”》
1976(昭和51)年 リトグラフ、紙(両面刷)



《konyaku No.8》
1965(昭和40)年 リトグラフ、紙 個人蔵



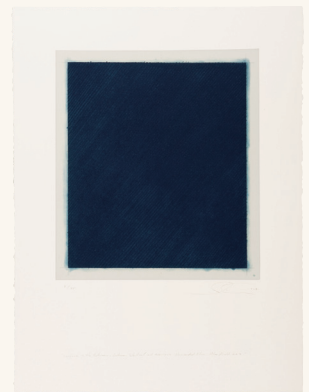
《Blue Cake》1967(昭和42)年
リトグラフ・シルクスクリーン、紙



《pink of place》
1970(昭和45)年 リトグラフ、紙



《Portfolio—In front of, In back of—
“Surface for the Paper Bag No.2”》
1975(昭和50)年～1976(昭和51)年
リトグラフ、紙、紙袋貼付 個人蔵



《Surface is the Between—Between Vertical and
Horizon—“Descended Blue—Blue Field No.2”》
1982(昭和57)年 エッチング・アクアチント・ドラ
イポイント・スピットバイト・シンコレ、紙 個人蔵

キャリア教育と職場体験、 そして美術館



総務課での業務を体験

「キャリア教育」という言葉を耳にされたことがあるでしょうか。これは文部科学省が中心となって提唱している、子どもたちの職業観、勤労観の形成を目指した教育のことです。そもそもキャリアとは一生涯の職業的活動を指しますが、その根底には「生きる力」の育成という目的があります。つまりは生涯という長い期間を通しての自らの役割を、働くことに見いだせない若者が増えている、という社会情勢を反映してのことでしょう。このキャリア教育の中心的な取り組みは、各事業所での仕事を数日間経験する「職場体験」です。当館でも今年度、15校約40名の中高生をそれぞれおよそ三日間ずつ受け入れました。と、数字で書いてしまえば簡単に見えるこの職場体験、実のところ、体験してもらった内容に頭を抱え、毎回試行錯誤しています。

職場体験自体は、将来の職業に具体的に結びつけることを目指してはいませんが、先の目的に従い、働くことの意義を学べれば良いはずですが、けれども、そもそも仕事の中身が見えにくい美術館ですから、体験してもらったことだけが美術館の仕事だと感じてもらえるのも困りものです。ここは一つ翻って、職場体験を美術館について知ってもらう機会にしよう(担当者は)目論んでいます。

生徒の皆さんはどのような仕事を想像して当館に来ているのでしょうか。当日までに館内を回って、美術館で働く人について考えてきてもらいますが、目にとまるところは受付やミュージアムショップ、展示室内の監視員などです。それ以外の仕事を見つけ



職員や図書ボランティアを前に作品解説

てくる生徒はなかなかいません。展示室に掛かっている作品がなぜそこにあるのか。誰が選んで、誰が運んで、展覧会が終わったらどうなるのか、というところまで意識を向けることは、なかなか高いハードルのようです。

一方この『News』をお読みの方が「美術館で働く人は?」と聞かれたら「学芸員」と答えてくださると思いますが、この職業はまだ一般には馴染みのないものですが、かく言う担当者も高校生まで聞いたこともありませんでしたし、学芸員とは監視員のことだと思っている方も少なからずいらっしゃるようです。そして実際の学芸員の仕事内容は、作品資料の収集、保存、展示、調査研究、さらには教育普及活動にまで及びます。それぞれが専門性の高い仕事であるため、容易に体験してもらえるものではありませんが、学芸業務の一端として展示室の作品を観察し、文献を調べ、自分の言葉で解説文を書いて職員の前でトークをする時間を設けています。中には目を見張る観察力と表現力で解説してくれる生徒もいて、こちらが勉強になることもしばしばです。

もちろん学芸員の他にも、美術館には種々様々な仕事があります。展示室の空調が効いているのはなぜか、その費用は誰がどうやって払っているのかということに目を向ければ、管理運営を司る総務課や機械設備の仕事、さらには作品保存の問題までが見えてきます。生徒たちが書庫

に入るとまずは図書資料の多さに驚きますが、その本に番号ラベルが貼られているということは、それを分類・登録している人がいるはずで、学校に展覧会のポスターが貼ってあれば、それを発送した人がいます。挙げ出したらきりがなくこういった複雑多様な美術館での仕事を、できるだけ広く、見学し手伝ってもらっています。

さて、おそらく他の職場ではひとつの仕事を三日間通して行うことで、失敗したりそれを乗り越えたりする各自の成長が見られることでしょう。それこそが職場体験の本来の目的だと思います。そう考えると当館での職場体験は、数多くの仕事には触れることができますが、断片的であるので、仕事をしたという達成感にはさほど得られないかもしれません。けれども幸いどの生徒も、作品を守って次の世代に伝えてゆくという美術館の役割は、しっかりと理解してくれているようです。ならば当館の職場体験は、一人ひとりの仕事は生涯という限られた時間におさまるのではなく、もっと大きな時間の流れの中にあるということに目を向けて、働くことの意義について考える機会にはなり得るのではないのでしょうか。美術館とは、そういうところなのだと思います。

具体的な職場体験の内容は、当館ウェブサイトにて職種ごとに紹介し始めています。一度のぞいてみてください。

www.momaw.jp/workexperience/

(青木加苗)



版画プレゼントの額を準備



『NEWS』の発送作業

全国美術館会議ホームページの震災情報をめぐって

東日本大震災の被災地では、美術館・博物館の所蔵品を含め、数多くの文化財が被害を受けたが、全国各地の美術館・博物館・専門機関から多くのスタッフが被災地を訪れ、作品・資料の救出と修復に当たった。当館が加盟する全国美術館会議は、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会(事務局:東京文化財研究所内)の構成団体のひとつとして、文化庁の呼びかけによる「文化財レスキュー事業」において6件の救援活動に参加している。いずれも津波による甚大な被害を受けた三陸海岸地域における美術館施設等の文化財を対象としたものであった。当館からは筆者の他、4名の学芸員が、下記4件の救援活動に参加した。

1. 石巻文化センター(宮城県)

石巻市文化センターにて:寺口淳治学芸課長(4月下旬)
宮城県美術館内の作業所にて:井上芳子学芸員(5月中旬)

2. 陸前高田市立博物館(岩手県)

陸前高田市立博物館にて:筆者(6月中旬、7月初旬・中旬)
盛岡市内の作業所にて:筆者(8月下旬、9月下旬)、植野比佐見学芸員(9月初旬)、宮本久宣学芸員(9月中旬)

3. 宮古市民文化会館、宮古市役所(岩手県)

筆者(8月末)

4. 宮古市個人宅(岩手県)

筆者(9月末)

筆者が主に携わった陸前高田市立博物館の救援活動については追って報告する予定である。本稿では全国美術館会議ホームページが掲載した震災に関する情報をめぐって、いくつか書き記しておきたい。

全国360館あまりの国公立美術館・博物館が加盟する全国美術館会議(以下「全美」)は、保存研究部会をはじめとする7つの研究部会を中心に着実な活動を積み重ねてきた。阪神淡路大震災の折には、いち早く現地の美術館に入って独自の救援活動を行い、その後は文化庁の呼びかけによる文化財レスキュー事業に参加した。全美はその時の経験を、種々の報告書というかたちで残している。

筆者は2004年10月から2006年3月まで有志とともに全美ホームページの開設準備に携わり、開設後も全美事務局(国立西洋美術館内)をサポートするかたちでその運営に関わっている。開設準備の間、メンバーが最も力を入れたのは、全美が発行してきた77冊の印刷物をPDF化し、さらにHTMLファイルに変換してホームページ上に掲載する作業であった。もちろん阪神淡路大震災関係の報告書類もそこに含まれている。ただ震災関係の報告書類について、一覧性のある特集ページのようなものを作ることはしなかったため、よほど根気のある人でないかぎり、散在する震災関連情報のなかから求めるものを探し出す事は難しかったはずだ。筆者は、このこと



石巻文化センターでのレスキュー活動
撮影:寺口淳治



陸前高田市立博物館でのレスキュー活動
撮影:江上ゆか

を気にして、2008年5月に長崎市内で開催された全美総会でも次のような発言をしている。

「ホームページ運営研究部会として、これから一番取り組んでいきたいと考えているのは、すでにこのウェブサイトの中に蓄積されている有益な情報に、簡単にアクセスできるようにすることです。

例えば、今日、長崎県知事が最初に災害ということをおっしゃいました。全美ホームページ上で災害という言葉を入れて検索すると、350の文書をリストアップすることができます。全美は災害問題について議論して、資料を蓄積しているということです。ただ、その文書を一つずつ見ていくのは大変です。重要度の高いものから、われわれが情報を引き出せるようにしたいと考えています。

例えば、1999年の総会報告書に掲載されている大災害時における対策、連絡網、援助活動等について。あるいは阪神大震災に関する1996年の報告のなかの緊急調査、地震の際の応急処置、資料リスト。膨大な情報の中から、こういう有益なものにたどり着きやすくする方法を、部会と事務局でこれから考えていきたいと考えています。」

しかし、東日本大震災が発生するまで、この作業は手つかずのままだった。

全美事務局は2011年3月11日に連絡本部を設置。東日本の会員館207館の被災状況に関する情報収集を実施して被害の概要を全美ホームページに掲載した。(第一報:3月16日、第二報:3月18日、第二報英語版:3月31日、第三報:4月18日)筆者は、あわてて大規模災害への対応に関する参考資料の編集に着手し、3月15日に公開したが、しばらくして、ホームページに掲載していなかった重要な文書がまだ数多く残されていたことを思い出した。

1996年の阪神淡路大震災で被害を受けた美術作品や美術館内部の画像は、関係者の承諾を得て全美の印刷物に掲載されていた。しかし、震災から10年後の2006年に開設したホームページに再掲載する際には、もちろん関係者に改めて文書で掲載の承諾を求める必要があった。これには煩雑な事務が伴うことから、部会の幹事であった筆者はこの作業を先送りし、それどころか、先送りしていたことすらいつしか忘れてしまっていたのである。筆者は3月

17日にホームページに訂正記事を書く一方、電話とファックスで17名の著作権者に連絡をとった。約2週間かけてほぼ全員の承諾を得たのち、3月30日に「大規模災害への対応に関する参考資料」を掲載した。以下にその一部を掲載する。

大規模災害への対応に関する参考資料

- 「美術館の地震対策の現状と課題」(1993年)
 - ・平成5年1月15日釧路沖地震をめぐる教訓
 - ・美術館における地震対策の可能性について
 - ・アンケート：“美術館の地震対策について”集計報告
- 「美術館の耐震対策について」(1995年)
- 『阪神大震災美術館・博物館総合調査 報告Ⅰ』(1995年)
 - ・未来の美術館に向けて 阪神大震災を教訓として
 - ・阪神大震災と全国美術館会議 支援活動から総合調査へ
 - ・調査報告 阪神大震災美術館・博物館総合調査実施要綱
- 「阪神大震災が残した課題」(1996年)
 - ・講演「防災計画と人命への視点」
 - ・「阪神大震災での諸活動を出発点として
一救援ネットワーク形成をめざして一」
- 保存ワーキンググループと阪神大震災美術館・博物館総合調査メンバーからの報告
 - ・全国美術館会議の災害発生時の情報伝達と救援活動組織例
- 『阪神大震災美術館・博物館総合調査 報告Ⅱ』(1996年)
 - ・阪神大震災と全国美術館会議－震災体験と美術館活動
 - ・調査報告
 - ・シンポジウム「阪神大震災と美術館をめぐる」報告
 - ・パネルディスカッション「次の震災に向けて」
 - ・被災主要3館と全国美術館会議の一年 1995.1.17-1996.1.17
 - ・緊急調査・応急処置資材リスト
- 「大災害発生時の救援ネットワーク案」(1997年)
 - 「救援ネットワーク案」(事務局試案)提案に至る経緯について
- 『第47回総会報告書Ⅰ』(1998年)
 - 「大災害時における対策等に関する要綱」
 - 「大災害時における連絡網実施要領」
 - 「大災害時における援助活動実施要領」
 - 「大災害時における行動」
- 特別セッション「美術館と防災」(1999年)
 - 高知県立美術館の冠水の被害状況と復旧作業について
 - 高知県立美術館被災作品の応急処置について

この一覧の掲載後、文化庁から、「緊急調査・応急処置資材リスト」を文化庁のホームページに掲載したい旨の依頼が全美事務局にあった。文化財関係者が、二次災害の防止や応急処置、被害状況の調査を行う際の参考にできるようにである。もちろん執筆者の

承諾を得たのち、ただちに掲載された。

文化庁ホームページ>東日本大震災 関連情報>4. 災害時における対応方法

また文化財等の救援や保全に関して有用なサイトを紹介するコンテンツも制作され、2011年4月18日に全美ホームページで公開された。このサイトの制作には、保存研究部会をはじめとする全美の各研究部会メンバー、そして当館学芸員が関わった。

全国美術館会議ホームページ>東日本大震災 救援・支援活動特設サイト>関連資料・関連サイト



このように、全美ホームページによって、被災作品等の救援や保全に関する重要な情報が提供されたことは確かであるが、「大規模災害への対応に関する参考資料一覧」のようなコンテンツの編集は、今回のように災害が起こってからあわてて行うのではなく、平時にやっておくべきであったと反省している。「文化財等の救援や保全に関するサイトの一覧」のバージョンアップも、多方面の専門家の協力を求めてすみやかに着手し、一層役立つものにならなければならないと考えている。

(浜田拓志)

人間と自然の美術

4月14日(土)～6月3日(日)

美術にとって今も昔も変わらぬテーマである自然の姿。近年では自然と人間との関係にも目が向けられています。多様な表現を通して人間と自然のあり方を考えます。

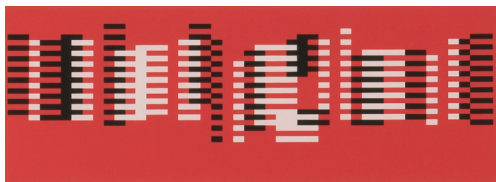


狩野光雅 《雨後》1936

なつやすみの美術館2

6月30日(土)～8月26日(日)

作品に「何が」描かれているかの前に、私たちは「色」や「かたち」を見ていることをあらためて振り返ってみましょう。大人から子どもまでが楽しめる展覧会です。



ジョセフ・アルバース 《Formulation: Articulation I-8》1972

生誕120年記念 田中恭吉展

9月1日(土)～10月14日(日)

和歌山市に生まれ、絵と詩が響き合う表現を生み出した田中恭吉(1892-1915)の12年ぶりの大回顧展です。初期から晩年までの水彩画、ペン画、木版画など、初公開作品も含めた約300点を展示します。

田中恭吉 《心原幽趣Ⅰ〈V悔恨 第一〉》1915



生誕120年記念 川口軌外の歩み展

11月10日(土)～2013年1月14日(月・祝)

現在の有田川町に生まれ、戦前から戦後にわたって洋画家として活躍した川口軌外(1892-1966)の生誕120年を記念し、その生涯の歩みを紹介します。



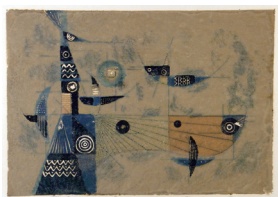
川口軌外 《少女と貝殻》1934

謄写版の冒険 卓上印刷器からはじまったアート

2013年2月9日(土)～3月24日(日)

手軽な印刷術を芸術の域にまで高めた昭和の謄写版画家、清水武次郎、若山八十氏たち。資料を含む約250点により、知られざるアートの冒険を紹介します。

若山八十氏 《風》1975



コレクション展 2012 - 春

特集展示 井田照一
3月6日(火)～5月27日(日)

井田照一
《Surface is the Between - Between
Vertical and Horizon -
"Stone, Paper and Stone"》1976



コレクション展 2012 - 夏

なつやすみ特集 野田哲也
6月9日(土)～9月2日(日)

野田哲也
《日記 1977年8月10日》1977



コレクション展 2012 - 秋

幻想の美術

9月11日(火)～11月25日(日)

エドヴァルド・ムンク
《病める子》1896

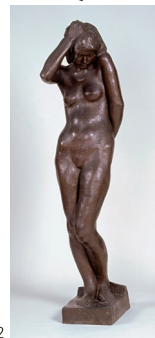


コレクション展 2012/13 - 冬

没後70年 建畠大夢
12月4日(火)

～2013年2月24日(日)

建畠大夢 《感に打たれた女》1932



コレクション展 2013 - 春

特集 版画・図版・オブジェ
2013年3月9日(土)～

第66回和歌山県美術展覧会

I 10月24日(水)～28日(日)

II 10月31日(水)～11月4日(日)

メールマガジンのご案内

展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。ぜひご利用ください。



友の会
会員特典
いろいろ

1. 展覧会の無料観覧(同伴者1名まで)
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
6. 版画の頒布会への参加

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690

担当：松原

開館/9時30分～17時00分(入場は16時30分まで) 休館/月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

